

チェルノブイリの子どもたち

チェルノブイリ子ども基金 NEWS No. 105 2016年10月15日発行



2016年夏 子どもたちの特別保養



みなさまの募金のおかげで子どもたちを保養に招待することができました



ベラルーシ



ウクライナ

CALENDAR NA 2017 GOD (31 LET CHERNOBYLSKOJ AVARII)



2017

チェルノブイリの子どもたち

—広河隆一—

★2017年チェルノブイリ救援カレンダー “チェルノブイリの子どもたち” 撮影：広河隆一
完成しました！ お申込み受付中！

報告会「2016年夏 子どもたちの保養・チェルノブイリと福島」
11/12 (土) 13:30~16:00

会場：パルシステム東京新宿本部 7F大会議室(東京都新宿区)

詳細は最終頁をご覧ください。

放射線汚染地域に住む病気の子どもたちのための特別保養

2016年夏 ウクライナ ベラルーシ

みなさまからのご寄付のおかげで、今年もウクライナとベラルーシの子どもたちの保養プロジェクトを実施することができました。ウクライナの慈善団体「チェルノブイリの子どもたちの生存」代表者は「戦争による経済危機のため、チェルノブイリ被害者への支援がほとんど行われていない。今回子ども基金の招待で保養をした子どもたちが住む汚染地区では、国の支援の保養はなくなった」と言います。またベラルーシでは国内で原発建設が進んでおり、汚染地区の子どもの保養も、今後、徐々に汚染地区解除が行われることにより、人数が減らされていくとされています。ベラルーシの慈善団体「困難の中の子どもたちへ希望を」代表者は、「子どもたちの健康への影響は今も続き、汚染のない場所での保養は健康を守るために今後も必要」と言います。

ウクライナの子どもの保養

■場所：ヘルソン州ゴロプリスタン地区 保養施設「カメロット・トゥール」

■期間：2016年7月3日～7月16日（14日間）

■参加者：子ども40人（8歳～12歳／ジトーミル州ナロジチ地区）、引率者4人。

■参加者の病名：慢性扁桃腺炎、慢性気管支炎、血管神経症、機能性心雑音、胸部奇形、慢性膀胱炎、膝関節疾患、胃腸疾患、肝臓疾患、腎臓疾患、腎盂腎炎、筋骨格系の疾患

<引率者たちからの手紙>皆様のご支援のおかげで、もう何年も続けてウクライナの汚染地区に住む子どもたちが、わが国の最もよいサナトリウムや保養所で保養をすることができることに、深くお礼を申し上げます。

今年、子どもたちはヘルソン州の黒海沿岸の保養施設で過ごすことができました。施設側は子どもたちに最もよい宿泊棟を提供してくれました。食事も、部屋の環境も素晴らしいもので

した。子どもたちは海、太陽、海風のそよぎ、海の香りを存分に楽しみました。これらを喜ばない子どもなどももちろん一人もいません。

毎晩、面白い催しがあり、子どもたちは歌ったり、踊ったり、コンクールやクイズ大会などに参加しました。「ネプチューンの日」という海がテーマのお祭りもありました。子どもたちは海辺ではしゃぎまわりました。

また、私たちは農場公園に遠足に行きました。そこでは無限の美しさをもつ自然と触れ合うことができ、忘れがたい思い出となりました。また古代の人たちがどのような暮らしをしていたかなど、ウクライナの歴史に触れることもできました。野外で食事をしたり、プールで泳いだり、ボート漕ぎをしたりしました。どの子どもたちも目を輝かせ、どれだけ楽しい時間を過ごしたことでしょう。子どもたちの保養は成功し、興味深いものとなりました。

子ども基金のみなさん、ジトーミル州の放射線汚染地区から保養にきたグループの子どもたち、このグループの引率者たち、そして国際慈善団体「チェルノブイリの子どもたちの生存」より、このような素晴らしい保養をさせてもらったことに心より感謝しています。こ



の保養により、子どもたちは体だけでなく、心の面でも大変素晴らしいものを得ました。いろいろな経験をし、新しいことを学び、多くの子どもたちが自分の新しい面を発見したり、力を発揮したりしました。

子どもたちはまた、みなさまがウクライナの私たちの問題に関心を寄せてくださっていること、そして保養が重要であるということを理解しました。そのことにより、子どもたちの心はあたたかさに包まれ、将来を信じる希望が現れました。それは大変貴重なものです。

引率者：ゼゼンコ・A・I、ニコネンコ・V・R、ブチェンコ・N・A、グループの代表：ベズバビナ・N・A、「チェルノブイリの子どもたちの生存」代表 ザクレフスカヤ・L・A

<子どもの感想>

「日本のみなさん、素晴らしい夏をありがとう」「遠足、海、自然、花々など楽しい思い出となりました」「海水浴、ディスコ、コンクールと、とても楽しい思い出ができた」「黒海での素晴らしい保養、新たな友達との出会い、再び海を訪れる機会を下さり感謝します」



ベラルーシの子どもたちの保養

■場所：子どもリハビリ・健康回復センター「ナデジダ（希望）」 ミンスク州ビレイカ地区

■期間：2016年8月2日～8月25日

■参加者：子ども34人（8～17歳／ゴメリ市、レチツァ市、ブラーギン市、モーズィリ市、ブダ・コシエリョヴォ市、スヴェトロゴルスク市、その他）、引率者2人。

■参加者の病名：脳腫瘍、目の腫瘍、白血病、悪性リンパ種、甲状腺がん、精巣腫瘍、卵巣腫瘍、腎臓がん、肝臓がん、血小板減少性紫斑症

参加者の多くはこれまでにナデジダで保養をしたことのある子どもでした。今回初めて参加したのは9人、また日本の里親から支援を受けている子どもは13人でした。

到着後、医師による診察が行われ、それぞれの子どもの滞在中の治療プログラムが組まれます。保養期間の中頃に再度診察を行い、治療の効果を確認、治療プログラムが変更される場合もあります。保養の最後の健診の結果は子どもたちに渡され、親や地元の病院の医師に伝えられるようになっています。

引率者、ナデジダのスタッフ、医師、看護師、心理カウンセラーたちは、それぞれ連絡を取り合い、子どもたちの健康と心の状態に気を配ります。

滞在中、午前中はそれぞれ決められた治療を受けます。マッサージ（手技によるもの、水圧を利用したものなど）、アロマセラピー、スペレオセラピー（塩治療：天然の塩の部屋で過ごすことで呼吸器官の病気に効果があると言われている）、薬草療法、歯科治療などがあります。午後はクラブ活動（陶芸、絵画、手芸、木工細工、音楽など）や、催し物（コンサート、ゲーム、コンクール、スポーツ大会）などに参加します。子ども基金スタッフによる教室（折り紙とミサンガ作り）も行われました。三食の他に軽食（果物、ジュース、ヨーグルトなど）が3回あります。夜は映画観賞とディスコ（体育館で小さい子どもから大きい子どもまで一緒になって踊ります）が交互に行われます。

自由な時間には、敷地内にあるさまざまな遊具で遊んだり、広場でサッカーやバレーボールをしたり、図書館で本を読んだり、レクリエーション室で仲間とゲームをしたりと、思い思いに過ごします。

今回、初めて保養に参加したアーニャという女の子（14歳）は、1年前（2015年8月）に抗がん



剤治療を終えたばかりでした。長い入院生活が続いたため、初めはなかなか他の子どもと打ち解けることができませんでした。薬の副作用で太ってしまったことにコンプレックスもあり、他の子どもたちが写真を撮る時も、「私はきれいじゃないから」と写ろうともしませんでした。天候の変化で体調を崩し、施設内の医療センターのベッドで数日間過ごしていました。看護師は「彼女はもう回復しているのですが、気持が外に向けられないようです。これまでずっと病院で、医師、看護師に囲まれる生活に慣れてしまっているのでしょう。あとは外に出て友だちを作ろう、という意思の問題」と言いました。風邪をひいて熱を出した、同じグループのマリーナという女の子がアーニャと同じ病室に送られてきました。二人は仲良くなり、マリーナが回復すると同時に、アーニャも外に出ることができました。ちょうど翌日はアーニャの誕生日でした。同じグループの子どもたちが彼女の誕生会を開きました。部屋に風船を飾り、お祝いのカードを作り、プレゼントを用意しました。アーニャはみんなに誕生日を祝ってもらい、記念写真も撮りました。次の日から保養の最後まで、もう医療センターの病室に戻ることはありませんでした。そして、アーニャと同じように、少し引っ込み思案だった男の子と仲良くなりました。

やはり1年前まで抗がん剤治療を受けていたダニーラという男の子（8歳）も、初めてこの保養に参加しました。最終日、子どもたちはそれぞれの感想を言い合いました。参加者のうち最年少のダニーラは「この保養に招待してくれた日本のみなさん、ありがとうございます。僕と遊んでくれたここにいるみんな、ありがとうございます。そ

して僕たちの世話をしてくれた引率者のみなさん、ナデジダの先生、お医者さん、看護師さん、ありがとうございます」と挨拶をしました。その場で聞いていた大人たちはうれしさのあまり泣きそうになりました。

<小児科医：ジャンナ・I>

このプロジェクトの参加者はどの子どもとても注意が必要です。たとえば、血液の病気の中の「血小板減少症」は、免疫力が低下するといつどんな重大な病気になるかもしれないという危険性を持っています。白血病のようにがんでないからといって安心できないのです。一番深刻なのは、免疫不全症のこの男の子です。長く生きるのは難しいかもしれません……。参加者のリストには脳腫瘍、腎臓がん、リンパ腫、などの重い病名だけが記載されていますが、ほとんどの子どもが他にも病気を持っています。心臓の異常、慢性扁桃腺炎、腎盂腎炎、脊椎側弯症などです。

<引率者：スヴェータ・N>（ゴメリ市の病院勤務、看護師）参加する子どもたちの親に事前にアンケートをとり、食べ物の好き嫌い、アレルギーの有無、飲んでいる薬のこと、趣味などについての情報を得ました。24日間一緒に過ごすのにみんなが仲良く楽しくできるように配慮しました。子どもたちはみな病気を乗り越えようと懸命に生きています。ナデジダのスタッフは子どもたちのことを最優先にしてくれて素晴らしいです。

<子どもの感想>■今年もここで保養できて友だちと再会できてとてもうれしかった。日本のみなさんに感謝します。（ナースチャ・15歳）■クラ



ブ活動、ディスコが楽しかった。毎日忙しくて、お母さんを恋しがる暇もなかった。来年もまたここへ来たい。(リーザ・9歳) ■ナデジダでは毎日が楽しかった。良い仲間と出会えたのがよかった。(イリヤ・15歳) ■毎日が充実した大満足な日々だった。ひとつだけ残念なことは、私はもう来年はここに来ることができない。ナデジダなしでどうやって生きていけばいいのか……。 (マルガリータ・17歳) (※ベラルーシでは18歳から成人。ナデジダは子ども専用施設のため17歳までしか保養ができない。)



2016年4月に「ナデジダ」が作成した冊子「私の心のナデジダ、ナデジダで保養をした子どもたちの歴史」に、2014年4月、子ども基金の招待で来日講演をした

インナさんの文章が掲載されました。

インナ・シネオカヤ 32歳
ウクライナ・キエフ市在住。

私は1981年10月21日に生まれました。他の子どもたちと同じように幼稚園に通い、学校に上がりました。勉強に色々なクラブ活動(絵画、歌、手芸)に一生懸命に取り組んでいました。ところが13歳になった時、甲状腺がんが見つかりました。ある人がたまたま、私の首に卵大の何か腫れ物があることに気づいてくれたのです。そこで病院の検査を受け、すぐに甲状腺の全摘出手術を受けることになりました。以来、私の人生は一変しました。子どもが普通は深く考えることのない「健康」というものについて、それが何であるのか、身をもって理解することになったのです。

治療を受けるために私は学校の授業を沢山欠席しなくてはなりません。とても辛く、悲しく、孤独な気分になり落ち込みました。しかし、病院や、ウクライナの救援団体「チェルノブイリ・核の傷跡」で同じような子どもたちと出会い、私たちは努めてお互いに助け合うようになりました。何ととっても私にとってショックだったのは、病

気に苦しむ同じような境遇の子どもたちが大勢いたということです。それでも、そうした子どもたちはみんな諦めずに病気と闘い、より良い将来を信じて、その日その日を生きられることを喜びあっています。この経験は、幸福というものに対する自分自身の考え方を大きく変えることになりました。人が何か不幸に見舞われたとき、それでも絶望せず、自分自身を見失わずにしっかりと保ち続けるには、精神的な支えというものがとても必要です。1996年、15歳の時にベラルーシを訪れ、「ナデジダ」で保養を経験したことが、私にとっては、そうした前向きな気持ちをもって生きていく上での糧となりました。

「ナデジダ」での毎日はとてもわくわくするものでした。音楽のレッスン、シンセサイザーを使ったゲーム、色々なフェスティバル、スポーツ大会やコンクール、ディスコ大会、それから心理学の専門家との面白いワークショップ、サークル、遠足のことを今も思い出します。でも一番大切なのは、私の中に生きる力を与え、たとえ病気を抱えていても自分は沢山のことが出来る、そして自分と同じような子どもたちにも未来があり、それは信ずるに足るものであるという確信を与えてくれた沢山の大人や子どもと出会い、交流することが出来たという経験です。

それから、「ナデジダ」には日本からもボランティアの人たちがやって来ました。日本の人たちは、沢山のとても興味深く、役に立つ教室を開いてくれました。そこで私は生まれて初めて遠い日本の国の文化にも触れることが出来ました。そして多くの友達を作ることが出来ましたし、何人かの人たちとは今でも親交があります。

私は32歳になりました。大学を卒業し、教育者として働き、結婚し、母親になることも出来ました。私たちのことを気にかけて、見守り、温かな心で接して下さったこと、そして私たちの子ども時代の思い出を明るく輝くもので満たして下さいたことに対して、「ナデジダ」に関わる全ての皆さまに感謝いたします。

<※インナさんはチェルノブイリ子ども基金の「甲状腺手術後の子どものための特別保養」に参加しました。>

原子力を選んでいない子どもたちを被曝から守りたい

小出裕章 (後編)

「チェルノブイリ 30 年・福島 5 年救援キャンペーン 小出裕章講演会」

(2016 年 4 月 23 日・練馬文化センター)

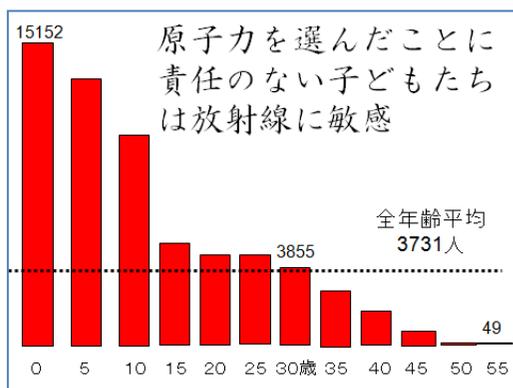
<原子力を選んだことに責任のない子どもたちは放射線に敏感>

今日は、原子力を選んだことに責任のない子どもたちの被曝を減らしたいとはじめにみなさんにお伝えしました。今日この会場に集まってきてくださったみなさん、ありがとうございます。私は本当にみなさんに感謝をしたいと思います。事故から 5 年たっても福島の事故を忘れずにこの場所に今日集まってきてくださった。でもそのみなさんにしても、福島の事故を引き起こしたことに無罪だとは私は思わないのです。大人として何十年か生きてきて、日本というこの国が原子力をどんどん暴走していくことを、何となく放置した、原子力にとことん突き詰めて考えなかった、という程度の責任は多分みなさんにはあると私は思っている。しかし、子どもたちはまったく責任がないのです。そしてその子どもたちというのは被曝に大変敏感なのです。今からそれを見ていただきます。

<放射線がん死の年齢依存性 1 万人・シーベルトあたりのがん死数（白血病は除く）>

放射線がん死の年齢依存性というものです。被曝をして、いずれがんで死んでいくという人たちは必ず出るのですが、そういう運命を受ける人たちは年齢ごとにそれが違うのですが、それを年齢依存といいます。それを見ていただこうと思います。この図を細かく説明し

ますと、時間がかかってしまっても今日ではできませんので、簡単に見ていただこうと思います。まず 30 歳の方が被曝をしたときに、これから生きていく間にどのくらいの、がんで死ぬ危険を負うかというのをこの赤い帯の高さで示しました。<30 歳 3,855 人>そして 30 歳の人というのは全年齢を平均したときの被曝の危険度と、ほとんど等しい危険を負うことになります。<全年齢平均 3,731 人>今日この会場にも、30 歳くらいの方がいらっしゃると思いますけれども、そういう方は自分のごくごく平均的な被曝の危険度を持っている人間だ、とだけ思っていればいいと思います。そして人間、まあ人間だけでなく動物というのは年をとっていくと、どんどん被曝に鈍感になっていきます。何故かという、もう成長もしないわけだし、細胞分裂ということをどんどんしなくなっていくわけです。被曝をしてどこかの細胞のがんになるという運命づけられたとしても、それが細胞分裂してどんどん増えていくということが、年をとって



いくにしたがってなくなっていくわけです。そのため被曝の危険度が減っていきます。もうひとつは、例えば、いま私が被曝をして、どこかの細胞ががんになる運命を負う、宿命を受けた、といったとして、その受けた細胞が大きくなっていった実際の臨床症状としてがんになって死ぬ、というまでには10年とか、20年とかいう時間がかかるわけです。でももう私はいい加減に年をとっていますし、あと何年で全然別の原因で死んでしまうかもしれないわけで、そういう場合には被曝によって死んだのではない、ということになるわけです。そういう2種類の理由があって、年をとっていけばとっていただく、被曝をしてがんで殺されるという危険は減っていきます。どのぐらいかというのと次のようになります。50歳、55歳にもなればもう帯の高さが見えない。危険がないわけではありません。必ず被曝は危険を伴いますけれども、でも50歳、55歳にもなれば平均的な危険度に比べて70分の1とか、80分の1で済んでしまう、そして今日この会場に来てくださっているのはほとんどこういう世代の方ですけれども、こういう世代の人間、私も含めてこういう世代の人間が日本で原子力の暴走を許した張本人なんです。そういう人たちはほとんど危険を負わずに逃げのびることができてしまう。

逆に子どもたちは大変です。＜0歳 15,152人＞0歳の赤ん坊などは、平均的な危険度の4倍も5倍もの危険を負わされてしまうということになる。0歳、5歳、10歳というように毎日見ている面白いように成長していく子どもたち、その子どもたちが被曝の危険を一手に

引き受けさせられてしまう、そういうことになるわけです。

今、福島では子どもの甲状腺がんというのが多発しています。はじめに先行検査というのが2011年から2014年まで行われました。30万人の子どもたちが受診したのですけれども、その中からがんだろうと診断され、そして実際に手術も受けた人たちが100人を超えてきてしまっている。子どもの甲状腺がんというのは、従来の知識でいえば、100万人に1人とか2人だと言われていたのに、何と100万人あたりに換算すれば何百人というような子どものがんが生じて、発見されている。本格検査というものが2014年から始まりましたけれども——多分いまは終了、2年間ぐらいのはずだったと思いますが——そこでももう、はじめの3年間の検査で何も異常がなかったという子どもたちからまた新たに50人もの甲状腺がんが見つかったという状態になっているわけです。

＜甲状腺がんの多発と科学的な態度＞

2011年3月11日に原子力緊急事態宣言というのが発令されて、日本の法律がいま、停止されてしまっています。本当なら一年間に1ミリシーベルト以上の被曝をしてはいけないという国だったはずなのに、一年間に20ミリシーベルトまでは我慢しろという状態にさせられてしまっているのです。被曝は微量であっても必ず危険を伴います。放射線の被曝に大変敏感な赤ん坊も含めて、みなさん今の原子力緊急事態宣言だというそのもとで被曝をさせられてしまっているのです。いったいど

れだけ被曝をしたのかということ実はわからないのです。なぜかといえばあの事故はあまりにも過酷な事故であったがために、発電所内の放射線測定器もみんな死んじゃったのです。周辺の放射線測定器も地震と津波で壊れてしまった、あるいはあまりにも放射能が強くて測れなかったということで、ほとんど何のデータもなく、住民たちがどれだけ被曝をしたかということもわからない。でも、確かに子どもたちの甲状腺がんが増えている。従来の医学的な常識から比べれば何十倍も多いという、そういう現実がある。原子力を推進してきた人たち、国にしてもそうですし、福島県の専門家といわれている人たちもそうですけれども、いやこれは被曝が原因ではないんだと、厳密に、厳密に、検査をしたからたまたま見つけているだけだと、逆に言えば従来そういう検査をしなかったから見つからなかったということを彼らは言っているわけです。でも、従来そうした検査をしなかったと言うなら、これからちゃんと検査をして原因を突きとめます、と言わなければいけない。それが科学的な態度だと私は思いますけれども、日本の国というのはそうはならないのですね。とにかく被曝ではない、というようなところから始まってしまう。あまりにも情けない学者が多いし、でたらめな国だなと私は思います。甲状腺がんの多発はすでに疫学的にも異常だということが証明されてしまっていますし、先ほど佐々木さんが話されたようにチェルノブイリの経験なんかをみれば、小児の甲状腺がんだけじゃないのです。もうさまざまな病気がたくさんでできたということは事実

としてわかっているわけだし、これから福島でも子どもを中心としてたくさんの病気ができてしまうんだろうなと私は心配をしています。

いま何をしなければいけないかといえば、たったひとつだと私は思います。日本で原子力の暴走を許してきた大人たち、私たちがやらなければいけないことは、自分たちが被曝をしても子どもたちだけは被曝から守らなければいけない、ということだと私は思います。本当であれば、放射線管理区域にしなければいけないようなところから、人々を全員逃がさなければいけないのです。日本の国家が倒産するかもしれないけれども、それでもいいと私は思っています。とにかくやらなければいけないと私は思うけれども、この日本の国はそんな国ではないようです。そうなればチェルノブイリ子ども基金の人たちがずっと続けてきてくださったように、子どもたちを一時的にでも保養として連れ出すといったことをやらなければいけないと思います。いま福島では子どもたちは泥んこになってはいけな、花を摘んではいけない、雑草に触ってもいけないというふうに育てられているわけですが、そんなことをしたら子どもは子どもらしく育たない。ちゃんと子どもたちが育てる環境を一週間でもひと月でも、やはり作り出していくということを私たちはやらなければいけないのだらうと思います。

＜どんなに辛い事実でも

視ないより視た方がよい＞

残念ながら大変辛い現実が今日の前にあり

ます。被曝は必ず健康に害を与えます。風評被害ではなくて実害を受けるものです。そして日本の国は、逃げたい人は勝手に逃げろ、一度逃げた人間ももう住宅の補償も何もしないと、汚染地帯に帰れと言いはじめているわけです。そうすると人々は逃げられません。今日この会場に、場合によっては福島から逃げてきてくださっている方がいらっしゃるかもしれません。一家全員で逃げられた方もいる、でもそうすれば仕事を捨てたりして逃げるわけですから生活がなりたない。男親は汚染地に残って母親と子どもだけを逃がしたという家庭もたくさんあります。そういう家庭の中では夫婦が離婚するということになった人たちもたくさんいます。たいていの場合はもう逃げられない、ということになって汚染地にとどまっているわけです。人々は恐怖を抱えながら生きるということではできませんので、何とかして汚染があることを忘れたいと思い、国のほうは積極的に忘れてしまえと言っている、マスコミもそう言っているわけです。そうになると、いま福島ではもうしかたがない、とにかく自分たちの生きているところを復興させよう、ということになっています。そして福島県産の食べ物を買ってほしいので、福島県産の食べ物の安全を示すためということで、学校給食にも福島県産のものを使うということになっていますし、去年の秋には、国道6号線という猛烈に汚染した道路、そこを走るときには窓を閉めて走れ、止まっただけいけないというような国道の清掃作業に学童を動員して、福島はこれだけきれいですということをアピールしようとした。捨てられてしまっ

しょうもないということは、私はよくわかります。何とか復興したいという気持ちもよくわかります。でもそのために子どもを動員するというだけでは私は間違いだと思います。でもそんなことを言うと復興の邪魔だといって逆に非難されるという、そんな状況になってしまっています。生活を根こそぎ破壊されて流浪化した人は事故の被害者です。放射線管理区域にしなければいけないところに捨てられてしまった人たちも被害者です。何とか逃げようとして生活を犠牲にしながら逃げた人も被害者です。そういう被害者がお互いに分断されて非難をしあうという様なところに追い込まれてしまっているわけです。その一方で、この事故の責任があった東京電力、日本の政府などは一切誰ひとりとして責任をとらないまま生き延びて、また原子力発電所を再稼働させるというふうなところに進んでいっているわけです。いまやらなければいけないことは、本当は被害者たちが連帯して、加害者にきっちりと責任を取らせるということだろうと私は思います。大変苦しい現実ですけれども、でもそういう現実があるということをしつかりとやはり視るといふところからはじめ。そして子どもたちを何とか被曝から守る、ということをやりたいと私は思います。

長い時間を使ってしまいました。どうもありがとうございました。

※当基金のホームページにおいて講演の動画をご覧ください。

http://homepage2.nifty.com/chernobyl_children/2016-kouen.html

1998年から開始した里親制度により、これまでに287人の子どもが日本の里親から支援を受けました。現在支援を受けている子どもは69人です。8月に訪問した里子を紹介します。

イワン・R 2007年生まれ

スヴェトロゴルスク市

左頬の横紋筋肉腫。2013年に発病。

母親の話「初めは頬が腫れ始めたので歯科に



かかった。リンパ腺の腫れかと思われたが、詳しい検査をしたら悪性腫瘍とわかった。ミンスクの病院で1年間、化学療法7ブロック。口の中の治療の最中は何も食べられなかった。定期検査は、以前は2か月に1度、今は3か月に一度。18歳まではこのように定期検査が必要。照射治療後、頬が少しへこんでしまった。薬の影響なのか、落ち着きがなかったり、感情的になったりする時期があったが、今は少し落ち着いてきている。化学療法の副作用で太り、食事療法と規則正しい生活が必要と指導された。姉のダーシャにはアレルギーがある。以前は喘息もあった」

父親はブラーギンの出身で、チェルノブイリ汚染地区からの避難民。事故当時は16歳。チェルノブイリ被災者証明を持っている。父親の住んでいた地区では、事故後、徐々に住民の避難が始まったという。「初めは小さい子どものいる家族から優先。その後は、もう少し上の年齢の子どものいる家族。そのあとは、移住を希望する家族、という順番だった。うちの家族は93年からここ、スヴェトロゴルスクに移り住んだ。他にも避難先の町の候補はいくつかあった。どの町、どんな間取り、何部屋、などの条件の中から選んだ。息子の病気は、自分が放射線汚染地区に住んでいたことと関係があるのかもしれない」と話す。「その上、この町自体もあまり良い環境ではない。工場が多いため空気がよくない。ほかにも、麻薬中毒の問題が小学生にまで及んでいる。この町の学校を卒業したら、他の町で働いて暮らした方がよいと思っている。健康上良い職場はこの町にないとみんな思っている」

ウリヤーナ・S 2005年生まれ

レチツツァ市

左腕の横紋筋肉腫。2015年に発病。

母、祖父母とともにアパートで暮らしている。ウリヤーナが病気になり、高額な治療費がかかるとわかったとき、祖父母は自分たちの家を売りお金を作った。母親の話。「2014年12月、ウリヤーナの食欲が落ち、具合が悪くなった。左肩の下あたりにしこりがあるのに気づき、2015年1月4日、すぐに病院へ行った。その2週間後から治療が始まった。初

めは普通のウィルス性の病気とされていたが、リンパ節の腫れはだんだん大きく硬くなっていった。熱がないのに、寝ると大量の汗をかいたり、吐き気があったりした。詳しい検査をして腫瘍とわかり、化学療法が始まった。病院で10ブロックの化学療法、治療途中にはしかにかかり中断、その後さらに6ブロック。病院と自宅を往復した。その後、1週間に2回、ミンスクの病院に通院しながら28回の照射療法を受けた。2か月間、ほとんど何も食べられなかった。肝臓の問題もありドイツ製の薬を自費で買っている。1つのアンプル

(1回分の治療に必要な薬)は300ユーロ。心臓の問題もある。化学療法の薬はベラルーシ製のもが用意されていたが、自費で買った外国製の薬で治療をした。リトアニアのビザを得て薬を買いに行った。化学療法の最中、1年の半分は病院にいた。治療後23キロくらいまで痩せてしまったが、今は治療前の体重に戻った。背も半年で15センチ伸びた。ビタミン剤はオーストリア製のものを買った。初めにかかった医師は、ウリヤーナは再発の可能性が大きいといった。娘のために必要なこと、できることは何でもやろうと思った。高価でも自分で買って外国製の薬を使って治療をしてもらった。うまくいくと信じている、それしかない。これだけやっているのだから(母と祖母は涙を浮かべていた)。



今は2か月に一度ミンスクの小児がんセンターに検査に行く。まだ入院している、知っている子どもたちにプレゼントを持って行ったりする。入院している子どもは病気の辛さをわかっているからみんなとても優しい。娘が点滴しているとき、自分が少しその場を離れ、戻って見たら別の子どもが娘をなでて励ましてくれていたこともあった。

学校からは休学の最中何の連絡も、援助もなかった。9月からはギムナジウムに行く。教科書を入れるリュックなど揃えないと。自分が勤務しているのは大きい企業なのに何も助けてくれない。ウリヤーナがまだ小さいころに離婚した夫(実父)は、今まで連絡もないし、何の援助もない。

知人を通して、病気の子どもをもつある父親(※1)の連絡先を教えてもらった。その人は治療のこと、薬のこと、慈善団体のことなど、ほんとうに親身になっていろいろ教えてくれた。一度も会ったことはない、電話でだけ。子どものためにとっても力を注いでいる。そして他人の私にまで。こんな父親はとても少ないと思う。ふつうは母親のほうが一生懸命だから」(※1: 名前を聞いてみたら、ちょうど翌日訪問することになっている、子ども基金の里子の父親だった。)

祖母の話「娘(ウリヤーナの母親のこと)はとても行動力があるし、決断力もある。な

んでも自分で調べ、自分で決める。こういう母親でなければ、病気の子どもを助けることはできなかつたでしょう。治療費を作るために自宅を売りましたが、一人娘の、たった一人の孫娘のためですから、残念ともなんとも思っていない」

ウリヤーナは動物が大好きで子犬を飼っている。アパートの周りの野良猫に餌をやったりもしている。近所の人とはだれとでも話す社交的な子で、知らない人とでも気軽に話して友だちになれるという。

ディーマ・K 2012年生まれ ゴメリ市

右睾丸の腫瘍。2013年に発病。

母親の話「1歳半のとき、精巣が腫れて大きくなり、浮腫であろうと、液状のものを取る手術をすることになった。開いてみたら、悪性と分かり、2~3週間後にミンスクの小児がんセンターで手術と化学療法を受けた。2014年3月20日に再手術。その後また化学療法。現在は3か月に一度の定期検査。5年間は厳しい管理が必要。治療後、外に行く時はいつもマスク。以前のように外では遊べなくなった。一度、呼吸が止まるような発作が起き、救急車を呼んだ。抵抗力がとても低く、幼稚園に通わせることを禁止されたため、母親は経理の仕事を辞めた。肝臓にも問題がある。神経系が弱い。強い日差しを浴びてはいけないため、夕方6以降、日が落ちてから外に散歩に連れて行く。

9月にまた検査に行くが、いつも結果が出るまでとても心配で手が震えるほど。ディーマは病院で白衣を見ると怖がる。医師は、ゴメ

リがチェルノブイリ事故の影響で放射能値が高いということも懸念している。これからも心配なことはいろいろあるが、きっとよくなると信じている。もう病気が戻ってこないようにと。ディーマと兄(10歳)のボグダンとは仲がよい。夫の母は子どもたちの面倒をよく見てくれて助かっている」

母親のマリーナは、チェルノブイリ事故当時4歳だった。強い風が吹き、空が暗くなり、窓を閉めるように言われたことを覚えているという。しばらくして当時の子どもたちはミンスクのサナトリウムで1か月くらい過ごした。

マリーナは甲状腺に結節がいくつもあり、定期検査を受けている。マリーナの叔母とその娘(現在36歳)は、それぞれ、15年前と2年前くらいに甲状腺がんにかかりチロキシン(甲状腺ホルモン剤)を飲んでいる。祖母はがんで亡くなった。従兄(現在40歳)が18歳の時ディーマと同じ病気になった。マリーナの両親、兄とも健康に大きな問題はない。



祖父（父方）は、チェルノブイリ事故後、汚染地へ物を運ぶ仕事をしていた。「ゴメリはチェルノブイリに近い。以前、自分が子どもの頃は、こんなに病気の子どもは多くなかった。放射能と関係があると思う」

リョーニャ・Z 2001年生まれ ゴメリ市

ホジキンリンパ腫（悪性リンパ腫の一種）。2011年に発病。リンパ肉芽腫。2012年には結節性硬化症と診断された。その他、心搏動の異常、甲状腺腫、糜爛性胃炎。背骨にも問題がある。

母親の話「リョーニャは、9月からコンピュータやオペレータの技術を学ぶ商業専門学校に通うことになった。本人はコンピュータが好きなので、そのような仕事に就けたら良いと思っている。昨年はナデジダの保養に参加したが、残念ながら今年は入学準備のため参加できなかった。息子は病気のため学校に通えず、2年間自宅学習をしていた。そのため勉強が遅れてしまったことと、健康上の問題か

ら、将来の職業選択が限られる。心臓に問題があり、少し走ったりするとしばらく休まなければならない。心臓の薬、甲状腺の薬を購入している。ビタミン剤、カルシウム剤なども服用している。頭痛もよく起き、体調を崩しやすい。以前はミンスクの病院へ通院していたが、今はゴメリの病院で3か月に一度検査を受けている。

私は店員の仕事をしている。1日15～16時間労働で、心身ともに負担が大きい。物価は上がっているのに、給料は4年間変わらない（母親の月収は約150ドル）。

親子は、台所と2部屋だけの大変古い木造アパートで暮らしている。そのうちの一部屋にリョーニャと母親、もう一部屋には祖母が暮らしているが、祖母は何も援助をしないという。離婚した実父は養育費を払っておらず、その他の援助もない。部屋の中には最小限のものしか置いてない。勉強机の上のコンピュータは壊れていた。引き出しの取っ手には、昨年ナデジダで保養をしたときに作った日本の「くみひも」が吊るしてあった。

リョーニャが台所にいる間、母親は話をしながら涙を抑えることができなかった。しかしリョーニャが戻ると涙を拭き、すぐ笑顔になった。3年前訪問した時（※2）、リョーニャはまだ子どもの顔をしていた。しかし今回会った時、彼は母親の辛さを理解し、母親を精神的に支えているように見えた。

母親は日本からの支援に対し「日本のみなさんが息子のことを忘れず助けてくれることはどんなに感謝してもしきれません」とまた涙ぐんだ。（※2:この時の様子は基金ニュース No.95（2013年12月号発行）に掲載）



ポリーナ・G 2004年生まれ

ゴメリ市

血小板減少症。先天性無眼球症。緑内障。生まれつき片方の眼球と鼻腔がない。

母親の話「ポリーナは体調が悪くなると目や鼻にすぐ症状が出る。感染症などへの抵抗力が低いため、目の炎症がよく起こる。

ポリーナの義眼は特殊なタイプで、はずれて落ちてしまうことがよくある。1年に1度は義眼を交換する必要がある。ミンスクの専門医のところへ1日かけて行く。義眼は15ドル、交通費もかかる。

鼻孔を空ける手術をベラルーシでした時には効果がなかったが、フランスで手術をしたら鼻から息をすることができるようになった。しかし、匂いを感じることはできない。目の手術はフランスで2回受けた。手術後しばらくは太陽光を浴びてはいけなかった。

ポリーナの通っている学校のクラスに、心臓の病気の子、喘息の子などがある。ポリーナだけ体育の授業に参加できないが、ダンス

の教室は喜んで参加している。8月に保養をしたナデジダはとても楽しかったようだ。以前、別のサナトリウムに行ったことがあるが、そこはあまり好きになれなかったようだった」

「以前は医師になりたいと思っていたけれど、今は英語の通訳になりたい。フランスで何度か保養をしたので、フランス語も少しわかる。今日学校に行って、9月からの新学期の教科書をもたらしてきたところ」とポリーナは話した。

＜ベラルーシの地図＞



今回の話に出てくる場所 (①ゴメリ ②スヴェトロゴルスク ③レチツァ ④ミンスク ⑤ブラーギン ⑥チェルノブイリ原発)

~~~~~

子ども基金が支援しているベラルーシの子どもたちは慈善団体「困難の中の子どもたちへ希望を」の会員です。この団体からの連絡によると、2016年2月には6歳の女の子が白血病により、9月には15歳の男の子が後縦隔神経芽細胞腫から脳への転移により亡くなりました。この団体の会員の子どもたちについて、詳しくは次頁をご覧ください。



ベラルーシの団体「困難の中の子どもたちへ希望を」は、甲状腺がんの手術を受けた子どもをもつ母親たちにより設立された団体です。当時の子どもたちは成人していますが、次世代の病気の子どものための救援活動を続けています。子ども基金は運営費（事務所家賃、スタッフ給料）の一部と医薬品代を支援しています。以下はこの団体の会員（4～17歳、156人）の病気の内訳です。元々は、甲状腺がんの子どもたちだけが会員でしたが、他の腫瘍病の子どもたちも会員として受け入れ支援するようになりました。さらにその後、小児病院や親たちの要望により腫瘍病以外の、以下のような病気の子どものうちも会員として受け入れるようになり支援をしています。

子ども基金の里親制度も当初、「甲状腺がんの手術を受けた子ども」が支援対象でしたが、この団体からの要請により、現在は、他の腫瘍病や以下のような病気の子どものうちも日本の里親から支援を受けています。  
(2016年10月時点)

| 病名／年齢 | 甲状腺がん | 脳腫瘍 | 目の腫瘍 | 肝臓がん | 腎臓がん | 未分化大細胞腫、白血病、血液病 | ニューイング肉腫 | 小骨盤の腫瘍 | 鼻咽頭の腫瘍 | 皮膚がん | 右副腎の腺腫 | 染色体疾患 | 血管奇形 | 首の海綿状血管腫 | 単一腎臓、先天性腎奇形、慢性腎炎 | 成長障害 | 縦隔神経芽細胞腫、ホジキンリンパ腫 | 神経芽細胞腫 | 結節性甲状腺腫 |
|-------|-------|-----|------|------|------|-----------------|----------|--------|--------|------|--------|-------|------|----------|------------------|------|-------------------|--------|---------|
| 4     |       |     |      |      |      |                 | 1        |        |        |      |        |       |      |          |                  |      |                   |        |         |
| 5     |       |     |      |      |      |                 |          |        |        |      |        |       |      |          |                  |      |                   |        |         |
| 6     |       |     |      |      | 1    |                 |          |        |        |      | 1      |       |      | 2        |                  |      |                   | 1      |         |
| 7     |       |     |      |      |      |                 |          |        |        |      |        |       |      |          |                  |      |                   | 1      |         |
| 8     |       |     |      |      | 1    |                 | 1        |        |        | 1    |        |       |      | 1        |                  |      |                   |        |         |
| 9     |       |     |      |      | 1    |                 | 3        | 1      |        |      |        | 1     |      |          |                  |      |                   | 2      |         |
| 10    |       |     |      |      | 1    | 3               |          |        |        |      |        |       |      |          |                  |      |                   | 1      |         |
| 11    |       | 1   |      | 1    | 2    |                 | 1        |        |        |      |        |       |      |          | 1                |      |                   |        | 1       |
| 12    |       | 2   | 1    | 1    | 3    | 3               | 1        | 2      |        |      | 1      |       |      |          |                  |      |                   |        |         |
| 13    | 1     | 4   | 2    | 2    | 1    | 1               |          |        |        |      |        |       |      |          | 1                |      |                   |        |         |
| 14    | 1     |     | 5    | 1    | 2    | 6               | 1        |        |        | 1    |        |       |      |          | 1                |      |                   |        | 1       |
| 15    |       | 2   | 2    | 2    | 1    | 8               | 12       |        |        |      | 1      |       |      |          |                  | 1    |                   |        | 1       |
| 16    | 1     | 7   | 1    | 1    | 1    | 7               | 2        | 2      |        |      |        |       |      |          |                  |      |                   |        |         |
| 17    | 1     | 8   | 2    | 1    | 1    | 5               | 6        | 1      | 1      | 1    |        |       |      |          |                  |      |                   | 1      |         |
| 計     | 4     | 24  | 13   | 9    | 15   | 33              | 28       | 6      | 2      | 3    | 2      | 1     | 3    | 3        | 1                |      | 6                 | 3      |         |
| 女     | 2     | 15  | 6    | 6    | 4    | 28              | 16       | 4      | 1      | 1    | 2      | 0     | 2    | 2        | 1                |      | 2                 | 2      |         |
| 男     | 2     | 9   | 7    | 3    | 11   | 5               | 12       | 2      | 1      | 2    | 0      | 1     | 1    | 1        | 0                |      | 4                 | 1      |         |

## チェルノブイリの歌声



このコーナーでは、支援者の皆様から寄せられた声をご紹介します。今回は「チェルノブイリ 30 年写真展」(7/30～8/31：岐阜県高山市、於高山別院照蓮寺)主催者の方からの声をご紹介します。

~~~~~  
チェルノブイリの原発事故から、ちょうど 30 年。新聞やテレビなどで組まれた特集を目にしながら感じるのは、事故当時から現在に至るまでの時間の幅と重みです。私は今年で 34 歳ですから、事故当時にチェルノブイリ周辺で生まれた子どもたちとほぼ同世代です。彼ら自身の、あるいはまた彼らを産み、育ててきた家族のこれまでの歩みは一体どのようなものだったのか。子をもつ親の一人として考えれば、やはりそれが一番気になります。

岐阜県高山市にある真宗大谷派「高山別院照蓮寺」を中心に活動してきた、私たち「飛騨仏教青年会」では、これまでも夏のお盆の時期に合わせて「企画展」を行ってきました。福島でのボランティア報告、日本国憲法パネル展示、丸木夫妻「原爆の凶」展示など、振り返ってみればいずれも、「今、この高山の地で私たちが考えられること、考えるべきことは何か」が焦点となっています。去年の「戦後 70 年」の節目に続き、今年の企画が「チェルノブイリ 30 年」写真展となったことには、同世代の私たちにとって何かしらの必然性があったように感じています。

大人だけでなく夏休み中の子どもたちもぜひ一緒に来てほしい、との願いから、本企画展の開催期間は七月末から八月末までとしました。子どもたちの言葉は実にストレートです。会場に設置されたメッセージボードには、

「とにかくこわいとおもいました」、「とてもびっくりしたし、悲しかった」、「この世からたたかいがなくなりますように」、といった言葉が並んでいます。それはまるで、私たち大人が考えるのをやめてしまったこと、「世の中はこんなものだ」などと割り切り、切り捨ててしまったことを代弁してくれているかのようです。広河さんの写真に映された一つ一つの表情は、“常識”に凝り固まった私たち自身を揺さぶり、その底から、普段は思いもしない感情を引っ張り出してくれます。

底のない悲しみは、人と人とを結びつける。お経に描かれる仏さまの国、「浄土」という世界はいわゆる「天国」ではないと言われます。それは、何でも自分の思い通りになる、都合のよい世界ではなく、「俱会一処」、つまり誰もがみなそこでいっしょに出会うことのできる世界だと。写真の中の一人ひとりの表情が、「私たちの生きていくべき場所はどこですか」と直に問いかけてきている気がします。

飛騨仏教青年会

内記洸 (ないき たけし)



★写真展開催中には、子ども基金の関連商品(絵葉書、ベラルーシの民芸品など)の販売にご協力いただき、また子ども基金が過去に開催した講演会のビデオ上映もありました。

***** 募金・救援状況 *****

●募金状況 2016年6月～9月 (単位:円)

	6月	7月	8月	9月
募金件数	184件	145件	64件	54件
救援寄付金	543,301	1,486,302	267,275	305,838
保養費	82,500	53,500	38,000	19,000
特別保養費	930,000	35,000	-	*936,200
里子支援	912,720	1,350,240	46,190	115,520
ウクライナの青年の 治療費支援	95,500	602,000	22,000	10,000
ニュース購読費	54,000	30,000	20,000	8,000
イベント賛同金	3,000	-	1,000	1,000
合計	2,621,021	3,557,042	394,465	1,395,558

*生活共同組合パルシステム東京様より平和カンパとして866,200円のご寄付を含ま☆ほかに、切手帳2冊分と6,114円分の切手・はがきのご寄付をいただきました。

●救援状況 2016年6月～9月 (単位:円)

<ウクライナ>	
◎ウクライナの青年の治療費追加支援	610,407
◎子どもたちの生存	
里子支援 10人(2016年7-12月分)	340,494
現地銀行手数料	3,095
<ベラルーシ>	
◎希望	
特別保養費	1,894,857
太陽光発電プロジェクト支援	2,448,267
◎困難の中の子どもたちへ希望を	
子どもの保養・列車代	31,323
里子支援 24人(2016年4-9月、7-12月分)	756,636
奨学生支援 1人	15,772
クリスマス・新年会支援	52,205
スタッフ給料(1年分)	250,584
車修理工費	49,938
◎チェルノブイリのサイン	
里子支援 3人(1年分)	187,938
スタッフ給料(1年分)	8,513

♥募金団体名一覧♥(順不同・敬称略)
紙面の都合上個人名は省略させていただいております。ご寄付をいただいたみなさまに心より感謝申し上げます。

【6月】三重チェルノブイリ被曝児童救援募金/照恩寺 【7月】ヒーリングスペース レイ/チェルノブイリ子ども基金 奥羽/ケイ歯科クリニック/日本ウクライナ文化交流協会/三重チェルノブイリ被曝児童救援募金/イエス・キリスト教 祈りの家/カトリック徳田教会/まわれ水車の会・とやま市民放射能測定室・とやま原子力教育を考える会/『日本と原発』上映会 【8月】ラブアンドピース/つゆくさと大地の会/NCC 平和・核問題委員会/自治労日野市職員組合【9月】原爆絵画展川越地区実行委員会/広河隆一写真展実行委員会(品川)/生活共同組合パルシステム東京/飛騨仏教青年会/あいち平和美術展/(株)音楽センター



◆2017年カレンダー6月(写真左)のポリシチュク・インナは、7歳の時甲状腺がんの手術を受けました。96年、97年夏にはナデジダで保養、97年4月には来日、日本の人々と交流しました。2012年カレンダーの表紙はインナでした(写真上)。結婚して女の子を出産しましたが、2009年に亡くなっていたことがわかりました。

2017 チェルノブイリ31周年救援カレンダー「チェルノブイリの子どもたち」 撮影: 広河隆一
かつて甲状腺がんの手術を受け、子ども基金の支援を受けた世代は、母親、父親となり、自分たちの子どもの成長を見守っています。今年7月に広河隆一さんが現地取材の際に撮影した家族の写真で構成されています。カレンダーの各月の小窓には、ベラルーシの「ナデジダ」で保養をした子どもたちの写真(撮影: 子ども基金スタッフ)が掲載されています。
■定価1,100円 送料別(6部まで200円、10部以上: 1部1,000円/送料別無料)
■お申し込み先・方法: チェルノブイリ子ども基金(FAXまたはE-mail、電話で。最終頁に記載) ■お支払方法: カレンダー到着後、同封の郵便振替用紙にてお振込ください。 ■カラー、サイズ: 縦42cm×30cm 見開きA3サイズ ■デザイン: 川島進デザイン室 *カレンダーの収益は、チェルノブイリと福島原発事故による被災児童のための救援金にあてられます。2016年版の収益は221万円でした。

事務局から

■報告会

「2016年夏 子どもたちの保養・チェルノブイリと福島」
11/12(土)13:30~16:00 (定員 50名)

資料代 500円 会場:パルシステム東京新宿本部 7F
大会議室 申込・問合せ:03-6767-8808(チェルノブイリ
子ども基金事務局) 共催:チェルノブイリ子ども基金、未
来の福島こども基金、生活協同組合パルシステム東京
<報告内容>

*「チェルノブイリの子どもたちの保養/ベラルーシ・希
望」佐々木真理 (チェルノブイリ子ども基金・事務局長)
*「福島の子どもたちの保養/沖縄・球美の里」増田満
里奈(「沖縄・球美の里」スタッフ)

*「福島の現状・子どもたちの健康について」黒部信一
(「未来の福島こども基金」代表、小児科医)

<申し込み・問合せ先> チェルノブイリ子ども基金

※関東圏の方にはこのニュースレターにチラシを同封し
ています。

■ボランティア募集

ニュース発送作業(年3回:2・6・10月)このニュースレ
ターの発送作業をお手伝いいただける方を募集します。
どなたでもお気軽にご参加ください。次回 2/18
(土)午後1時~4時頃まで。ご都合のよい時間帯だけ
でも大歓迎です。場所:東京ボランティア・市民活動セ
ンター(飯田橋駅ビル セントラルプラザ 10階)

※日程が変更になる場合もありますので、ボランティア
参加希望の方は、前日までにご連絡ください。平日午前
10時~午後5時 留守の場合は伝言をお願いします。

■「基金ニュースレター」について

募金をくださった方には、使途の報告としてニュースレ
ターをお送りしています。また、ニュース購読費(2,000円
/年)も募っております。印刷・発送などの経費の残金は、
募金として使わせていただきます。(※ニュースレターは
子ども基金のHPでもご覧いただけます。今後、
郵送がご不要の方は、お手数ですが事務局
までご連絡をお願いいたします。)



★支援金の振り込み方法についてのお知らせ★

いつもあたたかいご支援をまことにありがとうございます。
これまで同封の振込用紙によるお振込のほか、
下記(1)(2)の口座をご案内してまいりました。

(1)郵便局の口座をお持ちの方:子ども基金の郵便
口座へ直接お振り込み

郵便振替口座 00160-4-98316

口座名 チェルノブイリ子ども基金

(2)他金融機関の口座から、子ども基金のゆうちょ
銀行口座へのお振り込み

店番 019 店名 〇一九店(ゼロイチキョウ店)

預金種目 当座0098316

受取人名 チェルノブイリコドモキキン

(3)これに加え、下記の口座もご案内いたします。

銀行名:三菱東京UFJ銀行

支店名(番号):新宿中央支店(469)

口座番号:普通 1688367

口座名:チェルノブイリ子ども基金

上記のうち、ご都合のよい方法をご利用くださいませ。

※振込用紙以外でのお振込の場合は、お名前、金額、
ご寄付の内容をご連絡いただけますと大変助かりま
す。お手数をおかけいたしますが、どうぞよろしくお願
いいたします。

★編集後記★ 本年度最後のニュースレターをお届けし
ます。皆様のおかげで今年もチェルノブイリのこどもたち
への支援活動を行うことができました。ほんとうにありが
とございました。来年もどうぞよろしくお願いたします。

●チェルノブイリ子ども基金 NEWS 年3回(2・6・10月)発行●

〒177-0035 東京都練馬区南田中 2-7-7 Tel/Fax 03-6767-8808

E-mail: cherno1986@jcom.zaq.ne.jp

◇ウェブサイト <http://ccfj.la.coocan.jp/index.html>

◇事務局ブログ <http://blog.goo.ne.jp/cherno1986jimukyoku/>

※当基金は任意団体のため、ご寄付は税金控除の対象とはなりません。ご了承ください。